ジャン・ポーラン論（6）

―フェリックス・フェネオンとジャン・ポーラン―

久保田斉也

1．はじめに

『F.F. あるいは批評家[1)]』，これは，ポーランが 1945 年に著した書物のタイトルである。

「F.F.」とはフェリックス・フェネオン（Félix Fénéon）のことを指しており，姓名の頭文字を取ったイニシャルをなす。

フェリックス・フェネオンは，雑誌編集者であり，美術コレクターであり，アナーキストであり，かつ批評家でもある。彼は，1861 年に生まれ，1944 年にこの世を去った。このフェネオンについて，ポーランは言葉を紡ぐことになるのだが，その意図はどこにあったのか。

2．フェネオン紹介

フェネオンの活動は多岐にわたっている。彼は，仕事として，まず雑誌編集者としての経歴を持つ。1883 年から象徴主義時代の末まで，数え切れないほどの文学雑誌，美術雑誌の編集者となっている。例えば，携わった雑誌とは，『自由評論[2)]』，『独立評論[3)]』，『流行[4)]』などであり，そこで，自ら書いた記事を発表してもいる。

編集者としての仕事の過程で，同時期に，後期印象派の画家たち，スーラ，シニャック，ピサロなどとも親しくなり，彼らの作品を批評というかたちで擁護しながら，作品そのものの収集も始める。

フェネオンの後期印象派に関する批評は，『1886 年における印象派た

ち[5)]』，そして『印象主義の彼方[6)]』という書物にまとめられており，現在でも目にすることができる。それぞれの孤立した色彩が，網膜上で再構成される，という光学理論に基づきながら論を展開し，パレット上の色素の混合ではなく，光学上の混交に価値をおく後期印象派の絵画の「新しさ」を評価していた。

スーラなどが用いた点描画法は，この光学理論に基づいているが，孤立した色彩が，そのまま網膜上で再構成される様態，つまり，ばらばらの状態でありながら構成的である様態は，アナーキズムのある様態と相同的でもある。そのことに直接関係があるのかどうかは定かではないが，スーラたちを擁護するフェネオンは，実際アナーキストでもあった。ある事件の容疑者のひとりとして，裁判所に出頭を命じられ，彼が答弁した記録が残っている。

この裁判で答弁する際に，フェネオンが口にした言葉，あるいは応答の仕方が，そのまま彼の批評のスタイルに関わっているだろう。彼は，文学に関しても，美術，政治に関しても語ったが，その語り方は大上段に立って論を振りかざすものではなかった。彼が書いた文章は，全集でほぼすべてを見渡すことができる。寡作な批評家である彼の仕事は，あまり十分に知られてはいないが，言うべきことを的確に言うフェネオンのスタイルは，ポーランにある示唆を与えた。

３．簡潔で，的確で，効果的な言葉

ポーランは，裁判におけるフェネオンの言葉の選び方，応答の仕方に注意を向け，裁判長とフェネオンとのやり取りをいくつか引用している。
例えば，

裁判長―あなたが顔色のよくない人々を受け入れていた，と，あなたの管理人が証言しています。

フェネオン―私は，ほとんど，作家や画家しか受け入れていません。

裁判長―アナーキストのマタがパリに来たとき，彼はあなたの家に泊まりました。

フェネオン―おそらく，彼はお金がなかったのです。

裁判長―指示によって，あなたは，マタやオルティッズについての情報を与えることを拒みました。

フェネオン―彼らを巻き込むようなことは何も言うつもりはありませんでした。裁判長，もし同じことが起こったら，あなたに対しても同様に行動するでしょう[7]。

このようなやり取りを踏まえて，ポーランはコメントをつける。フェネオンは，「簡潔」で「礼儀正しい」口ぶりで，「身動きせずに」語る，と。裁判長とフェネオンのさらなるやり取りについては，「傲慢なところはなく」，むしろ口調は「遠慮がちで」，しかも「最も慎ましく」，それでいて「最も正確な」返答を模索しているかのようであった，とポーランは語っている。裁判における証人としてのマラルメも，「文学とは別の如何なるものを扱うときでも，自らの考えを表現することにおいて，最高に優れている[8]」と，フェネオンについて語っていた。「簡潔で」，「最も正確な」返答を試み，「簡潔」であり「正確」である言葉を「効果的に」実践するフェネオン。

このフェネオンの姿勢は，雑誌『流行』に書いた文章にも現れている。例えば，「湖畔の幼年期[9]」とか，「地中の荒い匂い[10]」とか，「雲という無定型な塊[11]」とか，あるいは「色彩が無気力になる混合[12]」といった言葉であり，このフェネオンの姿勢について，彼は言葉の装飾性よりは「厳密さ」の側に身を置いており，お世辞や文学的効果とはまったく対極の言葉の用い方をしている，とポーランは指摘している。この「厳密さ」を帯びた言葉を，ポーランはまた「痩せたエクリチュール[13]」と呼び，この「厳密さ」は「明晰さ」をも引き寄せる，というのである。

裁判における言葉の使い方，『流行』における記事での言葉の用い方からすでに明らかなように，フェネオンが，言葉を「簡潔」に，「正確」に，かつ「厳密」に，「明晰」に用いる姿勢に，ポーランは注目しており，このフェネオンの言葉への接し方を，ポーランは次のように述べている。

フェネオンはだから，厳密さを用いて，提示し描写することから始める。悪魔的な忍耐力を持って[14]。

といいながら，フェネオンが書いたドガについての批評を，ポーランは引用する。

> 女性たちが，脚を曲げてしゃがみながら，浴槽の器を満たしている。ひとりの女性は，胸に顎を乗せ，項を掻いている。もうひとりの女性は，向きを変えながらねじれた姿勢で，背中に腕を押しつけ，泡だったスポンジで，尾てい骨のあたりを磨いている。ごつごつした背骨はねじれている。豊かな胸から露わになった前腕は，脚の間に垂直に垂れ下がっている[15]。

絵画の作品を語る際，構図の観点から，主題の観点からなど，それを語る批評家の視点が設定されていることがあるが，フェネオンは，始めから特定の視点にあらかじめ立つことはない。フェネオンの手つきから，「提示すること」，そして「描写すること」を，彼のエッセンスとして，ポーランは引き出す。「提示すること」，「描写すること」は，「見せること」であり，「ほら，ここにこれがあって，これはこのようなのだ」ということを，具体的に，即物的に「見せること」である。文学的効果を狙った言葉ではなく，「厳密」に，具体的に「提示すること」[16]。

フェネオンは，語る対象に適応させるあらかじめの理論を持っているのではない。ひとつひとつの対象を具体的に見ることが，フェネオンのアルファでありオメガである。彼が批評を書くとき，実名ではなく，いくつものペンネームを使っていた時があるといわれているが，実際，彼は匿名性を好んでいた。つまり，自らが語るのではなく，まず対象に語らせること，あるいは対象そのものの具体性を，匿名性のままに「描写すること」。

あらゆる対象に適応させる理論を持たないこと，「正確」に「提示」し，「描写すること」というフェネオンのスタイルは，「説得しようとはしないこと[17]」という姿勢へと関連付けられる。「提示すること」，「描写すること」とは，ある対象を「ここにこれがあって，これはこのようであるのだ」と指さすことであり，そこでは同じ対象を見ている複数の人々が，同じ方向を向いている。だが，「説得する」とは，ある対象について，その対象を見ている複数の人々にむかって，ある人が「説き伏せている」のである。「提示すること」と「描写すること」，また「説得すること」とは，そこに居合わせ

ている人々に対する「力」の方向がまったく異なっている。前者は，開放的に「力」が働き，ある事柄が自ずと納得され自覚される。しかし後者は，少しばかり抑圧的に「力」が働き，ある事柄を納得させられる。フェネオンは，語る対象によって，それにふさわしい正確な言葉と，新しい言葉，そして効果的な言葉を同時に形成することができたと，ポーランは語っている。「説得」するのではなく，対象にふさわしい言葉で，その対象を「提示すること」，「見せること」，「描写すること」。これが，フェネオンのスタイルの根幹にあるといってよい。

４．「道端の人」としてのフェネオン

フェネオンにおけるこの対象との接し方は，どこに由来しているのか。それは，フェネオンが立っている位置に関係がある，とポーランは言う。人はそれぞれ，なにがしかの仕事に就き，専門性を身につける。医者の立場，建築家の立場，料理人の立場，文人の立場など，それぞれの仕事に特化した専門性を身につけ，それぞれの立場で必要上ものを考える。仕事という「公的」な「立場」と普段の生活における「私的」な「立場」とでは，それぞれの「立場」によって，一般的に考え方を異にする場合もよくあり得ることだ。「私的」にはこう思うが，「公的」にはこうしないといけないだろう，というように。「私的」な「立場」と「公的」な「立場」とが分離しているというのが，一般的といえるだろう。

しかし，ポーランによると，年の離れた友人であったフェネオンは，「私的」なフェネオンと「公的」なフェネオンにおいて，興味深くも一致していたという。「フェネオンがアナーキストであり，文法家であり，芸術の批評家であり，モラリストであることから窺える景色は，興味深いことに互いに類似している[18)]」と，ポーランは言う。

「私的」であることと「公的」であることが分離していないということ，そこでは「私的」であることがそのまま「公的」であることにつながり，「私的」＝「公的」という領野が開けることになる。両者において，それぞれの基準をもとに，感じること考えることが区分けされているのではなく，「私的」であっても「公的」であっても，同じ基準をもとに，感じ考

えるということだ。ということは，何らかの専門的な「立場」でのみ，感じ考えるのではない。ポーランが指摘しているように，フェネオンは，「批評家」という「立場」で，あるいは「知識人」という「立場」で行動していたのではない。ボクサーであり詩人でもあったアルチュール・クラヴァンは，フェネオンの友人であったが，クラヴァンはフェネオンを呼ぶとき，« Cher monsieur » とか « Cher maître » とは決して言わなかった。ただ単に « Cher homme » と呼んだのである。つまり，「批評家」ではなく「人」であり，「文人」でもなければ「文学者」でもなく，つまり「専門家」ではない「人」なのである。「矛盾を秘めた人[19]」であり「彼のなかに，さまざまな人がいる[20]」，それがフェネオンなのだ。

ある「立場」に囚われた「専門家」ではない「人」，これが「私的」であると同時に「公的」でもある領野であり，この「人」こそが，ポーランの言う「道端の人」の内実を指す。つまり，フェネオンとは，ポーランにとって，「道端の人」（l'homme de la rue）であり，さまざまな可能性を潜在的に秘めたトポスの別名なのである。

4．「道端の人」であること

ポーランは，「私たちの各々が，時代の偏見の奴隷のままにとどまるのです[21]」と言う。また次いで，「私たちの各々が，その偏見を分かち合おうとしなければ，偏見に反駁しようとして時代を見失うのです[22]」とも言う。「時代の偏見」に従うのか，従わないのか。

ところで，ポーランは，フェネオンが「間接的な仕事しか好きではない[23]」と口にしていたことを伝えている。「間接的な仕事」の間接性。例えば，批評において，直接的に「説得」しにかからないことの間接性であり，「説得」ではなく，何かが間接的に伝わるための「見せること」であり「描写すること」である。間接的であることとは，「力」の方向と大きさを調節することであり，そこにおいてこそ，言葉の「簡潔さ」や「正確さ」，「厳密さ」や「効果性」が問われることになる。フェネオンの人となりから，「穏やか」でありながらある種の「厳しさ」を引き出せるとしたら，この「間接的」であることという姿勢から来るものであるだろう。だから，「時代の偏見」に従

うのか，従わないのかと言えば，そうした直接性においてではなく，対象にふさわしい言葉で，言うべき時に，「的確」で「簡潔」で「効果的」に言い，あるいは，指さす，つまり「見せること」を，フェネオンは実践するだろう。彼は「間接的」に行動するということだ。「間接的」であることは「傍観的」であるということではなく，「力」の配分，コントロールを試みることであり，ソフィスティケーション化された行為をなすことと言ってもよい。

「間接的」であること。「力」のコントロールをすること。この「間接的」であることの「政治学」から，フェネオンの言葉へのアプローチと実践があるのだが，フェネオンは「よく沈黙する」ともいわれていた。「沈黙する」ことは，場にブランクを作り出すことであり，何度でもまた始め直すことができる「間接的」な行為といえるだろう。実際，ポーランは，フェネオンについて，「絶えず専門家になることを回避し，何度でも「人」になることを止めなかった[24)]」と語っている。「道端の人」になるために，つまり先入観に囚われず具体的に思考する「人」になるために，彼は今までの語りを中断し，ブランクを作り，再び新たに始めること，「間接的」であることの「美学」を実践したといえる。

ポーランは，この「道端の人」という言葉，あるいは「どこにでもいる人」といった類似表現を，政治的な事柄を語る際にも登場させる。

例えば，

> 政治は，たとえ専門家がその学識，勇気，雄弁，生まれにおいても，抜きん出た者，傑出した者，例外的な者であるにしても，そうした専門家の問題であってはなりません。政治とは，道端の人—女性も含めて—，つまり農民，労働者の問題なのです。それは，どこにでもいる人の問題であり，その人が政治を司って統治する能力を欠いているとしても，またとりわけそうした能力を欠いているときにこそ，彼らの問題なのです。思うに，ごく普通の人には，偉大な首長や演説家，あるいはアカデミー会員に見られるよりも，稀で例外的な何かがあるのです[25)]。

と語っている。

「専門家」ではなく「どこにでもいる人」，「道端の人」という鍵となる概

念は，ポーランが携わってきた仕事のあらゆる領域において，伺うことができる。「専門家」は自らが携わる領域と視点を固定化しているが,「道端の人」は, 具体的に生活をしている場からさまざまな事柄について具体的に考える。その具体的に考えるということのなかに,「稀で例外的な何かがある」。この「どこにでもいる人」あるいは「道端の人」という「匿名性」のなかに,「稀で例外的な何か」という特異性を見出す姿勢こそ，フェネオンを経由してポーランが絶えず立ち戻るトポスといえるだろう。

5．楽しむこと

対象によって言葉を選び,「簡潔」で「的確」で「効果的」に語るフェネオンは,「説得」するのではなく，対象を指し示し,「見せ」,「描写」していた。時には「沈黙」し，ふさわしい「新たな言葉」を再び形成する。

このフェエネオンの姿勢は，現在における診断と，それに対する処置の関係であり，時間軸として，現在と「その先」を見据えている。現在に不満な不満分子なのではなく，現在を脚色することなく判断し，そのことから開ける「その先」を見出す。

ポーランは，フェネオンが何かをするとき,「彼はいつも楽しんでいた[26)]」と語っていた。

「厳密」であることと「穏やか」でることが共存したように,「楽しむこと」が，フェネオンのなかで同居している。悲観的でも楽観的でもなく，希望でも絶望でもなく，現在を見据え，そこから展開される「その先」を「楽しみ」ながら「指し示す」。

ポーランは,『F.F あるいは批評家』の最後で，フェネオンについて,「私たちを豊かにするに十分にふさわしいひとつの事例[27)]」，として語っていた。ポーランによって「描写」されたフェネオンは, 幾分かポーランに似ている。ポーランも，フェネオンも,「楽しむこと」を忘れずに，過去・現在・未来を見据えていたことは確かだろう。

注

1）Jean Paulhan, *F.F. ou Le critique* dans *Œuvres complètes,* t. IV, Cercle du Livre Précieux, 1969, pp. 83-116.
2）フランス語の雑誌名は，*La Libre Revue* であり，経営者はマルチナル・ムーランである。
3）フランス語の雑誌名は，*La Revue indépendante* である。
4）フランス語の雑誌名は，*La Vogue* である。
5）Félix Fénéon, *Les impressionistes en 1886*, L'Esprit du Temps, 2019.
6）Félix Fénéon, *Au-delà de l'impressionnisme*, HERMANN, 1966.
7）Jean Paulhan, *op.cit.*, pp. 91-92.
8）*Ibid.*, p. 93.
9）*Ibid.*, p. 95.
10）*Ibid.*
11）*Ibid.*
12）*Ibid.*
13）*Ibid.*
14）*Ibid.*, p. 99.
15）*Ibid.*
16）「説得する」のではなく，「指し示すこと」，「提示すること」，「描写すること」，「見せること」という行為は，作家のタイプが異なるとはいえ，フローベールが自らの活動の中心に据えていた考え方であり，実践であった。実際，彼は「描写」の人であり，言葉によって可視化される透明な対象が，不透明さを帯びるまで「描写」をした。ともあれ，そこから，フェネオンにおいては「匿名性」が，フローベールにおいては「没我性」が引き出されることになるだろう。
17）「説得する」ことに関して，ヴァルター・ベンヤミンの興味深い記述がある。1928 年に単行本化されたベンヤミンの『一方通行路』のなかで，次のように書かれている。「男子用」という見出しがついており，「説得は実を結ばない」との記述が，簡潔に書かれているのである。「説得」という行為に関する，フェネオンとベンヤミンの邂逅といえるのかもしれない。『ベンヤミン・コレクション３　記憶への旅』，浅井健二郎編訳，久保哲司訳，ちくま学芸文庫，1997 年，24 頁。
18）*Ibid.*, p. 106.
19）*Ibid.*, p. 111.
20）*Ibid.*
21）*Ibid.*, p. 114.
22）*Ibid.*
23）*Ibid.*, p. 106.
24）*bid.*, p. 115.
25）ジャン・ポーラン，『百フランのための殺人犯―三面記事をめぐる対談』，安原

伸一郎訳，書心水肆，2013 年，所収，「訳者解説」，151 頁。

26）Jean Paulhan, *op.cit.*, p. 108.

27）*Ibid.*, p. 116.